

日蓮大聖人御書全集

しょうじいちだいにじけつみやくしょう

生死一大事血脈抄

新版
1774
）
1777

しようじいちだいじけつみやくしよう

生死一大事血脈抄

ぶんえい ねん さい さいれんぼう

文永9年('72) 2月11日 51歳 最蓮房

にちれん しる

日蓮これを記す。

ごじよういさいひけん そうら お

御状委細披見せしめ候い畢わんぬ。

そ しょうじいちだいじ けつみやく みようほうれんげきよう

夫れ、生死一大事の血脈とは、いわゆる妙法蓮華経こ

ゆえ しゃか たほう にぶつ ほうとう なか じようぎよう

れなり。その故は、釈迦・多宝の二仏、宝塔の中にして上行

ぼさつ ゆず たま みようほうれんげきよう ごじ か こおんのんごう

菩薩に譲り給いて、この妙法蓮華経の五字、過去遠々劫よ

このかた すんじ はな けつみやく

り已来、寸時も離れざる血脈なり。

みよう し ほう しょうじ にほう じっかい とうたい

妙は死、法は生なり。この生死の二法が十界の当体な

とうたいれんげ

い

てんだい

まさし

り。またこれを当体蓮華とも云うなり。天台云わく「当に知

えしよう いんが

れんげ ほう

うんぬん

るべし、依正の因果はことごとくこれ蓮華の法なり」云々。

しゃく えしよう い

しようじ

しようじ

あ

いんが

この釈に依正と云うは、生死なり。生死これ有れば、因果

れんげ ほう

あき

でんぎようだいしい

しようじ

また蓮華の法なること明らけし。伝教大師云わく「生死の

にほう いっしん みようゆう

うむ にどう

ほんがく しんとく

もん

てんち

二法は一心の妙用、有無の二道は本覚の真徳」文。天地・

いんよう

にちがつ

ごせい

じごくないしぶつか

しようじ

にほう

陰陽、日月・五星、地獄乃至仏果、生死の二法にあらずと

しようじ

みようほうれんげきよう

いうことなし。かくのごとく、生死もただ妙法蓮華経の

しようじ

てんだい

しかん

い

き

ほっしよう

き

めつ

生死なり。天台、止観に云わく「起はこれ法性の起、滅は

ほっしよう めつ

うんぬん

しゃか

たほう

にぶつ

しようじ

にほう

これ法性の滅なり」云々。釈迦・多宝の二仏も生死の二法

なり。

くおんじつじょう　しやくそん　かいじょうぶつどう　ほけきょう　われ

しかれば、久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我ら

しゅじょう　みつ　まった　さべつ　な　さと　みょうほうれんげきょう　とな

衆生との三つ全く差別無しと解つて妙法蓮華経と唱え

たてまつ

しょうじいちだいじ　けつみやく

奉るところを、生死一大事の血脈とはいふなり。このこ

にちれん　で　しだんなとう　かんよう　ほけきょう　たも

と、ただ日蓮が弟子檀那等の肝要なり。法華経を持つとは、

これなり。

せん　りんじゅうただいま　さと　しんじん　いた

詮ずるところ、臨終只今にありと解つて信心を致して

なんみょうほうれんげきょう　とな　ひと　ひと　みょうじゅう　せんぶつ

南無妙法蓮華経と唱うる人を、「この人は命終して、千仏

みて　さざ　くふ　あくしゆ　お

の手を授け、恐怖せず、悪趣に墮ちざらしめたもうことを為」

と とうろう よろこ いちぶつにぶつ ひやくぶつ

と説かれて候。悦ばしいかな、一仏二仏にあらず、百仏

にひやくぶつ せんぶつ たい

二百仏にあらず、千仏まで来迎し、手を取り給わんこと、

かんき かんるいお がた ほっけふしん もの ひと みようじゆう

歡喜の感涙押さえ難し。法華不信の者は「その人は命終し

あびごく い と さだ ごくそつむか きた

て、阿鼻獄に入らん」と説かれたれば、定めて獄卒迎えに来

て と そうら あさ あさ じゆうおう

つて手をや取り候わんずらん。浅まし、浅まし。十王は

さいだん ぐしようじん かしゃく いま にちれん でしだんなとう

裁断し、俱生神は呵責せんか。今、日蓮が弟子檀那等、

なんみようほうれんげきよう とな もの せんぶつ みて さず たま

南無妙法蓮華経と唱えんほどの者は、千仏の手を授け給わ

んこと、譬えば瓜・夕顔の手を出だすがごとくと思しめせ。

かこ ほけきよう けちえんごうじよう ゆえ げんざい きよう

過去に法華経の結縁強盛なる故に、現在にこの経を

過去に法華経の結縁強盛なる故に、現在にこの経を

じゆじ　　みらい　　ぶつか　　じようじゆ

うたが

受持す。未来に仏果を成就せんこと疑いあるべからず。

かこ　　しようじ　　げんざい　　しようじ　　みらい　　しようじ　　さんぜ　　しようじ　　ほけきよう

過去の生死、現在の生死、未来の生死、三世の生死に法華経

はな　　き　　ほつけ　　けつみやくそうじよう

い　　ほうぼう

を離れ切れざるを、法華の血脈相承とは云うなり。謗法

ふしん　　もの　　すなわ　　いっさいせけん　　ぶつしゆ　　だん

ほとけ

不信の者は、「即ち一切世間の仏種を断ぜん」とて、仏に

な　　しゆし　　だんぜつ　　ゆえ　　しようじいちだいじ　　けつみやく　　な

成るべき種子を断絶するが故に、生死一大事の血脈これ無

きなり。

そう　　にちれん　　でしだんなとう　　じた　　ひし　　こころ　　すいぎよ

総じて、日蓮が弟子檀那等、自他・彼此の心なく、水魚

おも　　な　　いたいどうしん　　なんみようほうれんげきよう　　とな

の思いを成して、異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え

たてまつ　　しようじいちだいじ　　けつみやく　　い

奉るところを、生死一大事の血脈とは云うなり。しかも、

いま にちれん ぐつう しょせん

今、日蓮が弘通するところの所詮これなり。もししからば、

こうせんる ふ だいがん かな にちれん でし

広宣流布の大願も叶うべきものか。あまつさえ、日蓮が弟子

なか いたいしん もの あ れい じようしゃ しろ

の中に異体異心の者これ有らば、例せば、城者として城を

やぶ

破るがごとし。

にほんこく いったいしゆじよう ほけきよう しん ほとけ な

日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて、仏に成る

けつみやく っ かえ にちれん しゆじゆ なん あ

血脈を継がしめんとするに、還つて日蓮を種々の難に合わ

けつく しま るざい

せ、結句この島まで流罪す。

きへん にちれん ざいじゆん なん あ たも

しかるに、貴辺、日蓮に随順し、また難に値い給うこと、

しんちゆうおも や いた そうろう こがね たいか や

心中思い遣られて痛ましく候ぞ。金は大火にも焼けず、

たいすい ただよ ぐ くるがね すいかとも た けんじん
大水にも漂わず、朽ちず。鉄は水火共に堪えず。賢人は

こがね ぐにん くるがね きへん しんきん
金のごとく、愚人は鉄のごとし。貴辺あに真金にあらず

ほけきよう こがね たも ゆえ きよう い しゆせん なか
や。法華經の金を持つ故か。經に云わく「衆山の中に

しゆみせん だいいち ほけきよう
須弥山はこれ第一なり。この法華經もまたかくのごとし」。

い ひ や あた みず ただよ あた
また云わく「火も焼くこと能わず、水も漂わすこと能わず」

うんぬん
云々。

かこ しゆくえん お きた こんどにちれん でし な たも
過去の宿縁追いかつて、今度日蓮が弟子と成り給うか。

しやか たほう ごぞんちそうろう ざいざいしよぶつど じようよしぐしやう
釈迦・多宝こそ御存知候らめ。「在々諸仏土、常与師俱生

しよぶつ ど つね し しやう
(いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず)」、よ

そらじいとそらじい

も虚事候わじ。

こと しょうじいちだいじ けつみやくそうじよう おんたず せんだいみもん

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね、先代未聞のこと

たつと たつと ふみ いしつ よ よ こころう

なり。貴し、貴し。この文に委悉なり。能く能く心得さ

たま なんみようほうれんげきよう しゃかたほうじようぎようぼさつけつみやく

せ給え。ただ南無妙法蓮華経釈迦多宝上行菩薩血脈

そうじよう しゆぎよう たま

相承と修行し給え。

ひ や て ぎよう みず くえ きよ

火は焼き照らすをもつて行となし、水は垢穢を浄むるを

ぎよう かぜ じんあい はら ぎよう

もつて行となし、風は塵埃を払うをもつて行となし、ま

にんちく そうもく たましい ぎよう だいち

た人畜・草木のために魂となるをもつて行となし、大地

そうもく しょう ぎよう てん うるお

は草木を生ずるをもつて行となし、天は潤すをもつて

ぎよう

行となす。

みようほうれんげきよう

ごじ

妙法蓮華經の五字もまたかくのごとし。本化地涌の利益

ほんげじゆ

りやく

じようぎようぼさつ

まつぼういま

とき

ほうもん

ひろ

これなり。上行菩薩、末法今の時、この法門を弘めんが

ごしゆつげん

あ

よし

きようもん

み

そうら

ために御出現これ有るべき由、經文には見え候えども、

そうろう

じようぎようぼさつしゆつげん

しゆつげん

いかんが候やらん、上行菩薩出現すとやせん、出現せ

にちれん

ひろ

そうろう

ずとやせん、日蓮まずほぼ弘め候なり。

あい かま

あい かま

ごうじよう

だいしんりき

いた

相構えて相構えて、強盛の大信力を致して、

なんみようほうれんげきようりんじゆうししようねん

きねん

たま

しろうじいちだいじ

南無妙法蓮華經臨終正念と祈念し給え。生死一大事の

けつみやく

ほか

まった

もと

ぼんのうそくぼだい

血脈、これより外に全く求むることなかれ。煩惱即菩提・

しょうじそくねはん

しんじん けつみやく

ほけきよう

生死即涅槃とは、これなり。信心の血脈なくんば、法華経

たも

むやく

いさい

むね

もう

そうろう

を持つとも無益なり。委細の旨、またまた申すべく候。

きようきようきんげん

恐々謹言。

ぶんえいくねんみずのえさるにがつじゆういちにち

そうもんちれん

かおう

文永九年壬申二月十一日

桑門日蓮

花押

さいれんぼうしようにんごへんじ

最蓮房上人御返事